

●病因病機学は中医診療体系の核心！

中医病因病機学

著者：宋鹭冰（成都中医药大学の著名な学者）

訳者：柴崎 瑛子

体裁：A5判 並製 608頁 定価：本体 5,600 円＋税（送料 315 円）

- 中医学の“核心中の核心”——それが病因病機学説！
- 病態把握が正確にできて始めて的確な治療方針が確立される！
- 「証」の形成・転化のメカニズムを徹底解明する！
- 現代の難病に挑戦するための新しい理論構築！

現代中医学の キーワード

病因病機学説が、今注目されている。「病機」という言葉は、もと『素問』『病機十九条』に出てくるが、病因と病機がセットになって、特別重要な意味をもって登場してくるのは、ごく最近のことである。現代中医学が誕生した1950年代には、「弁証論治」がさかんに論じられ、「弁証こそ中医学の核心」といわれた。80年代に入って「病因病機学こそ中医理論体系の核心」といわれるようになった（『中医臨床』誌62号を参照されたい）。

「弁証」と「病因病機」は、はたしてどう違うのか。議論は始まったばかりである。病機は弁証よりもより疾病の本質に迫る具体性をもったものとして位置づけられている。弁証一審機一立法。つまり診断にあたっては、まず弁証をし、各証候に内在する機序を分析して、ついで治療方針が検討されるのである。

この病因病機学説が今特別に注目され始めたのは、人類が体験したことのない新しい現代病が出現してきたことと無関係ではない。新しい疾患にどう対応するか、という厳しいテーマに直面して、既成の伝統的理論を踏襲するだけでは解決できないことが明らかになった。新しい病機理論の確立が早急に必要とされるのである。つまり、次の時代を見据えた理論構築のための戦略的テーマとして、病因病機学説が登場した、といえよう。



ご注文は FAX専用フリーダイヤルで 今すぐにFAX 0120-727-060

『中医病因病機学』の 翻訳出版を祝す

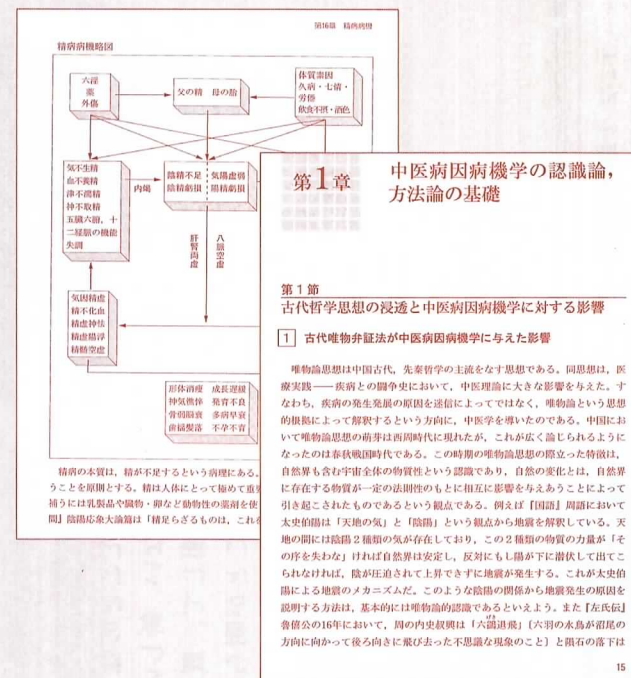
病因病機学とは、病がどのように生じて、進行してきたかを分析し、これからどのような転機をとっていくのかを類推するためのキーワードである。中医治療の神髄は、弁証論治という独特の診断・治療システムにある。弁証に際しては、診察の時点での患者の陰陽のバランス、気血・臓腑の動向、病邪の趨勢などを勘案して、その時点で行うべき最良の治療方針を策定する。中国のいわゆる名老中医は、診察の度に患者の最大の問題点を見抜いて、その度にそれに対応して治療方針を修正し、治療に導いてゆく。治療の経過で、時に大胆に治療方針を大きく転換することもある。それを見ていると、弁証とは、その時々リアルタイムの病態診断であるかのようにも思えてくる。しかし機に依じて適切に治療手段を講じていくためには、病気の原因を知り、どのような機序で進展してきたのかを把握する必要がある。そのことは、現時点での弁証に正確を期すためにも重要であり、予後を予測しながら中長期的な治療方針を立てるためにも必要である。ことに慢性疾患や難治性疾患では、目の前の症候に囚われずに、病因病機を見据えた治療が要求されるケースも少なくない。一貫性のある治療を行うためには、病因病機の分析はきわめて重要な意義を持っている。

1980年代の中国は、文化大革命の時期に抑圧されていた学問のエネルギーがほとばしり出た時期でもあった。文革期には、中医学の世界も教育が歪められ、研究も出版も大きく制限されていた。そのような制限から解放された80年代は、中医学の発展を図る情熱に溢れた時代であった。私は、その80年代の終盤に北京に留学することができ、たいへん幸運だったと思っているが、中医学の世界も時代のエネルギーを反映して、内容の濃い出版物が相次いで刊行された時期でもあった。留学中、毎週リュックサックを背負って街に出かけ、中医学書を網羅的に買い求め、病院の宿舎で読みふけたが、多くのすばらしい書に出会えて、たっぴりと充電できたような充足感を覚える日々であった。

帰国後まもなく、東洋学術出版社の山本社長から、日本の漢方学徒のために翻訳出版すべき良書の推挙を求められた際に、真っ先に挙げたのが本書であった。88年の6月に、人民衛生出版社の専門書店で出会った本書は、四川の老中医宋鷺冰氏を主編として、成都中医学院を中心とする名だたる執筆陣の手によって書かれている。副主編には、上海中医学院から四川に転じた高名な中西医の匡調元、日本でもお馴染みの傷寒論研究者郭子光、宋氏の直弟子で『景岳全書』の校注で知られる趙立勳の各氏、執筆者の中には、『中医病機治法学』の陳潮祖、『中医五臓病学』の鄒学熹、『中医内科学』の主編者李明富の各氏等、錚々たるメンバーが名を連ねている。内容もまた高度で、古典を十分に引用して根拠を明示しながら、中医の病因病機を系統的に解説している。ただ、中国語としては格調高いと思われる文体は、外国人にとっては読みやすくはなく、相当な中国語力がなければ、読み進むのは骨が折れるだろう。そのような良書をこの度、日本語で読めることになり、学習者にとっては計り知れない福音である。聞くところによると、私が翻訳出版を勧めて間もなく、東洋学術出版社では本書の研究班を組織して、学習しながら翻訳を進めてきたという。内容の濃い書であるだけ、日時を要したが、その成果がこうして世に現れるのは、まことに喜ばしく、誠実に取り組んでいただいた翻訳スタッフの皆さんには心から感謝申し上げたい。弁証論治の基礎となる病因病機を身につけるための必須の学習書として、本書を広く推薦させていただきたい。

東京臨床中医学研究会 副会長

平馬直樹



● 目次の一部 ●

【緒 論】

【第1篇 概論】

- 第1章 中医病因病機学の認識論、方法論の基礎
- 第2章 中医病因病機学の基本原理
- 第3章 基本病理過程

【第2篇 病因と発病】

- 第4章 病因概論
- 第5章 自然要因
- 第6章 生活要因
- 第7章 情志要因
- 第8章 体質要因
- 第9章 内生要因
- 第10章 その他の要素

- 第11章 発病メカニズム
- 第12章 疾病の変遷

【第3篇 病機】

- 第13章 臓腑病機
- 第14章 経絡病機
- 第15章 気血病機
- 第16章 精病病機
- 第17章 津液病機
- 第18章 体質病機
- 第19章 情志病機
- 第20章 痰飲病機
- 第21章 六気病機
- 第22章 六経病機
- 第23章 衛気營血病機
- 第24章 三焦病機